

F-7 少数民族

655. 少数民族とは

インドネシアの民族数は約 300 といわれる多民族国家である。最大多数民族のジャワ人はインドネシアの人口の約半数を占めているという実態から、ジャワ人以外は少数民族であるといえる。しかしスンダ人、マドゥラ人など数百万人の規模の人口を持つマジョリティ民族は、F-4 章(各民族とその社会)で紹介している。

それに続く規模の民族は地誌の各章でスマトラ島のガヨ族(→085)、アラス族(→085)、ニアス族(→096)、サカイ族(→566)、ルジャン族(→099)、クリンチ族(→100)、ランブン族(→103)、アブン族(→103)、カリマンタン島のバンジャル族(→192)、ダヤクの支族ガジュ族とオト・ダヌム族(→190)、スラウェシ島のマンダル族(→199)、カリリ族(→205)、ダヤ族(→205)、パモナ族(→206)、ブンク族(→206)、トラキ族(→209)、ワナ族(→206)、ブトン族(→209)、ヌサトゥンガラ諸島のササク族(→213)、スンバワ族(→214)、ビマ族(→214)、スンバ族(→220)、セラム島のアルフル族(→226)、ハルマヘラ島のトベロ族(→230)に言及した。

民族はインドネシアの東ほど多様多岐になる。人種的にはパプア系の血が入る。オーストロネシア語族と別群の語族がまだら模様を描く。宗教も複雑である。例えばスラウェシ島では 40-50 の民族がいるといわれる。フロレス島(→621)、ティモール島(→221)も島中に複数の民族を数える。パプア州(ニューギニア島)では民族識別の方法論も確立していないので民族数も分からない。

本章の少数民族としてとりあげた民族は人口も少なく民族というよりは部族とも言うべき規模の集団である。例えばトゥルニャン族(→661)は1万人の規模に達しない。しかしながらこれら少数民族は特異な文化を持つ民族である。これら民族の存在がインドネシアの実態を写す鏡となる。少数民族の存在を通してインドネシアがより明確になる。

日本人を知るためにアイヌ民族のことを勉強するに限る。アイヌ人という鏡に映る日本人を通して日本人のことはよりよく分かる、という記述を何かの本で見た時は目から鱗がおちる思いがした。

多民族国家であるが故の国家運営の困難さを伴ってもインドネシア文化の多様性を国是とするインドネシアでは少数民族に対して独自の文化を許容しているが、少数民族の文化の維持は困難な状況にある。

華僑といわれ、今日は華人といわれる中国系住民も少数民族であるという見解がある。異質な文化ゆえ華人は差別を受けインドネシアで孤立し、疎外されているという意味では少数民族である。しかし華人の人口の総数 1100 万人、総人口の 5%はインドネシアではジャワ人、スンダ人に次ぐ規模の有力な民族であってインドネシアの経済分野に大きな影響を持つ集団であり、ビジネスのタイクーンである。F-8 章でまとめている。

656. スマトラ島のクブ族

スマトラ島南部のクブ(Kubu)族は、「奥地の人」「上流の人」「沼沢の人」などとも言われるようにジャンビ州から南スマトラ州の奥深い低地ジャングルの中に隠れ住んでいる。人口も1万5千人程度にすぎない。

クブ族は大陸からの大規模な民族移動以前の先住民であるネグリティ族(→566)の血をひくといわれる狩猟民族である。家族単位でジャングルを放浪し、狩猟犬と槍による狩猟と採集が生計の手段である。カリマンタ

ン島の狩猟民プナン族(→663)に似ているが、クブ族にはプナン族の“吹き矢”の文化はない。



定住地はなく、2週間程度の仮住まい用の小屋を作るが、柱と屋根と敷藁だけというみずぼらしいものである。男も女も裸であり、下半身に性器を隠すだけの木の皮製の布切れのようなものを付けている。水浴の習慣もないので不潔である。クブ族の特徴は一切宗教らしいものを持たないことである。

他の民族との接触を避けクブ族はジャングルの中に孤立していたが、19世紀末に南スマトラで石油が発見され、石油探索隊がクブ族の住むジャングルに入り込むようになった。さらにジャワ島から農民が移住し農業開発が進むにつれ、クブ族も否応なく文明と係わりを持たざるをえなくなった。

クブ族の生活に決定的な打撃をもたらしたのはスハルト時代に完成したスマトラ縦断ハイウェイ(→845)である。狩猟民クブ族の“すみか”を貫くハイウェイはクブ族をいきなり文明社会に晒けだした。

ところで、インドネシアの法制では土地に対する私有権は人為的に開発された土地にしか認められていない。開発前(=農地でない)のジャングルや沼沢はすべて“国有地”である。従ってクブ族の狩猟のためのような土地は国有地である。

道路ができる以前の昔のままであればクブ族はそのまま狩猟を続けることで問題はなかった。しかし、ハイウェイができるとジャワ島などから土地のない農民が続々と移住して農地を拓いた。農民が未開地を開拓した農地は開発農民の私有地となる。森林の伐採権は別個の国の利権として都市などの開発会社に交付される。この結果、次第にクブ族の土地は蚕食^{さんしょく}されていった。

クブ族定着化のための政策はオランダ時代から試みられたが、彼らは農耕を嫌ってジャングルへ逃げ込むだけであった。しかし急速な開発に伴いジャングルを追われて生活の手段を奪われ、ようやくクブ族も政府の定着化政策を受け入れるようになった。

布製のシャツを着たりズボンを着けたり外見上は文明化した。しかし、農業になじめないクブ族は自らの農地を持たずに定住農民の日雇い労務者になった。農業の働き口にあぶれたクブ族は“乞食”で生計をたてるようになった。ハイウェイの車にたかる乞食(物売りもいる)がかつての狩猟民族のクブ族のなれの果てである。

657. 離島のムンタウエイ族

スマトラ島の西側の約百キロのインド洋上にスマトラ島に並行して百余りの小さな島が直線に並んでいる。北からニアス諸島(→096)、ムンタウエイ(Mentawai)諸島¹である。ムンタウエイ諸島はシベルト(Siberut)島、シポラ島、北パゲイ島、南パゲイ島から成り、人口はムンタウエイ諸島全域で8万人、その大半は面積4480km²ある最大のシベルト島に住む。

¹ スマトラ島のインド洋側をさらに南下したブンクル沖にエンガノ(Enggano)島がある。孤島で隔離されていたため鉄器が普及しておらず、独特の文化を維持している。エンガノはポルトガル語で「絶望」という意味である。1596年にポルトガル船が島を発見した際にジャワ島と思った期待はエンガノであった。



島の外周は珊瑚礁であり、その内側はマングローブに囲まれて港がないためインド文明も、イスラムも島の沖を素通りし、19世紀にオランダが来るまで石器時代に近い段階のまま文明から取り残されていた。北のニアス島は外部社会との交渉がそれなりにあったのと同様の対称的である。オランダがムンタウエイ諸島を自国領土であることを宣言して兵を駐屯したのは他のヨーロッパ国が海軍基地を建設することを未然防止するためである。

原住民のムンタウエイ族は数千年前にスマトラ島から移住してきたプロト・マレー系(→565)であるが、孤島に隔離され放置されていたため、インド化・イスラム化以前の文化がある。いわばムンタウエイ族は原始段階で停止したままの他文化に汚染されていない固有の伝統文化を保持してきたといえる。

インド洋上の北に連なるニアス島は厳しい身分社会で奴隷が存在していた。奴隷に対する扱いは冷酷であり、支配者はヨーロッパ勢にも奴隷を売り飛ばした。これに対してムンタウエイ島では首長・奴隷という身分がない原始共産社会である。ウマ(uma)という共同体に属し共同生活を営む。同ウマ間の結婚は禁じられている。

ムンタウエイ族では農耕が宗教でタブーとして禁じられているため基本的に採取経済である。主食はサゴ椰子(→770)であり、毒を塗った矢で小動物の狩りを行う。

衣類は木の繊維で作った“禪”^{ふんどし}を着用している。禪と刺青^{いれずみ}の風習は遠く離れたカリマンタン島のダヤク系(→624)の少数部族に見られるが、スマトラ島の他の民族にはない慣習である。

キリスト教団の布教の結果、住民は表面上はキリスト教に改宗したが、アラトツブラガというアニミズムの自然信仰が生きている。樹や岩は霊を持つのみならず個性をも持つ。キレイ(kerei)という祈禱師であるシャーマンがいる。プリアイジャット(puliajia)という宴会の儀式が機会ある毎に催されウマの団結が保たれている。

シベルト島はインド洋に隔離した島であり、スマトラ本島の間の海峡は深いため生物学的にも特殊な種が多く自然保護地域に指定されている。ジャングル・トレッキングなどのエコツアーが欧米人には人気ある。世界のいたるところの観光地という観光地には日本人が現れないところはないというのは当世であるが、シベルト島に来る日本人はいないらしい。パダンから定期便があるが、ムンタウエイ族の固有文化と自然保護のため、観光客の受け入れを制限している。

658. 隠れバドゥイ族

西部ジャワはスンダ人が割拠しているが、この山中にバドゥイ(Badui)族という外部と交渉をもたないで今日まできた民族がいる。彼らはかつて西部ジャワで栄えたヒンドゥー教を奉じたパジャジャラン王朝(→260)の末裔と自負している。ジャワ島がイスラム化する以前のヒンドゥー時代がそのまま凍結されている部族である。

バドゥイ族は15世紀以降のイスラム教の侵入に伴い、イスラムへの改宗を忌避して山中に逃げ込んだものと思われる。教義はヒンドゥー教とアニミズムの混合であり、彼らの所在地を世界の臍^{へそ}であるとしている。

ジャカルタからわずか 120 km余りの距離にすぎないが、天然の要害に囲まれたクندان(Kendang)山中であったため世間との没交渉が可能であった。日本でいうならば“平家の落ち人村”である。人口は5千人ほ

どで、孤立化のなかで古い文化に固執し外部との接触を拒絶してきた。神秘の民族としてボロブドゥールを上回る遺跡が隠されているという噂もあった。



バドゥイ族の構成は他民族とのいかなる接触をも頑じえない聖なる《中心部》の3集落を核としている。その周りの37の集落からなる《外縁部》を形成している。外縁部は他民族との接触は可能である。バドゥイ族の実体が次第に明らかになったのは外縁部の住人を通してである。

この部族はバンテン王国(→261)もオランダの植民地支配も日本の占領支配もインドネシアの独立も一切係わりあいを持たなかった“化外の民”である。為政者がバドゥイ族を放置していたのは攻略して支配しても税金もとれそうになかったからである。

近年になってようやく“インドネシア国民”であることを受け入れ、「大統領が村長より偉い」ことを認めた。ただしインドネシア政府はこれまで通りバドゥイ族の生活を侵害しないという条件である。このため政府としては特別立法でバドゥイ族を保護している。

バドゥイ族は今でも近代的なものラジオ、テレビはいうまでもなく例えばプラスチック製の炊事用具も一切拒否している。灌漑による水田は人為的であるので天水のみによる太古のままの農作である。化学肥料などは一切受け付けない。仮に外縁部の人々が地域の外へ出ても自動車なる文明の利器の世話にはならない。町に用があればどこまでも歩いて行く。

アメリカにアーミッシュというキリスト教の一宗派があって昔のままの生活をしている。アメリカ人にとって1620年にヨーロッパから移住してきた当時の郷愁からアーミッシュの生活の仕方そのものは一種の観光になっている。米国のガイドブックではバドゥイ族は“インドネシアのアーミッシュ”として紹介されている。

インドネシアでもバリ人やトラジャ人はそのユニークな民族文化が観光資源化している。最近のバドゥイ族は外部からの食料や綿製品は受け入れており、金銭も使用するようになったらしい。華々しい民族文化を保持しているわけでもない少数部族のバドゥイ族はどのような生き方をするか難しいところであろう。

659. プロモ山のテンガル族

プロモ山の中腹から高地に住むテンガル(Tengger)族は、ヒンドゥー教のマジャパヒト王朝(→248)がイスラム教のマタラム王朝(→250)にとって替わられた際、マジャパヒトの残党が山中に逃げこんだものである。ヒンドゥー教を頑なに奉じているテンガル族はジャワ人から畏敬も受けているので差別意識はないらしい。このことはジャワ人のバリ人への意識にも見られる。



この山の民は火山に恩恵を受けながら一方では火山の怒りを怖れながら生きてきた。このため年に一度、満月の日に「カソド(Kasodo)」というプロモ山の怒りを鎮める荘厳な儀式が行なわれる。儀式の手抜きのためかどうか、2004年小康を保っていたプロモ山の

40年ぶりの爆発があった。

伝説によればマジャパヒトの王女ロロ・アンテンは僧侶ジョコ・セゲル(Joko Seger)と結婚するが、二人はあ

る事情で王国におれなくなり山中に隠れ住む。二人の間に子供がなかったので山の火の神ベタラ・プロモに子供を授かることを願う。神はたくさんの子供を約束するが、最後の子供を生贖いけにえにすることを条件とする。やがて25人の子供をさずかるが、一番下の子供のケマスの可愛さから生贖に差し出すことを怠った。

ヒンドゥー教の火の神ブラフマの名にちなむプロモ山は怒り爆発する。ケマスは火口に吸い込まれるように落ちながら「皆のために喜んで犠牲になる、カソド月の14日に儀式を行ってほしい」という。残されたケマスの家族は儀式を行った。テンガルの民は先祖代々その儀式を引き継いできた。

火山に供える羊、鶏の生贖や農産物の供え物を手にして人々は噴火口へ進む。プロモ山は複式火山である。カルデラの幅2kmに及ぶ砂の海が新しい裸のプロモ山頂をとりまいている。見渡す限り荒涼とした岩と砂の中を人の群れの行列は大火口の縁に着く。自然の雄大さの中で蟻にも等しい人間の営みのはかなさが対照的である。

鳴動の絶えない火口の底へ火口縁から供え物が放り込まれる。すり鉢の途中には供え物を拾う人がいる。底まで届かずに途中で引っかかる供え物を拾う。網で受ける人もおり、お祭りの曲芸のショーのようである。

今日では儀式のやり方もバリから教わって観光化しており、インドネシア国内はもとより外国からも人が集まる。ちなみにこの祭の日は必ず晴天であるという。

高地のため稲作はできないのでとうもろこしが主食である。植民地時代以降、冷涼気候を利用してジャガイモや玉ねぎなどの温帯の野菜の栽培が行われるようになり、換金して米も食べるようになった。

高原野菜の栽培と登山客の観光案内が今日のテンガル族の生計である。貧しさから都会へ出る若者を描いた「ミラージュ(蜃気楼)」という映画のプロモ山の風景のシーンが印象的であった。テンガル族がチベット高原の民のように見えた。

⇒149.プロモ山の旭日

660. バリアガ/バリ島原住民

ジャワ島をイスラム教が席捲せつけんした際、多くのマジヤパヒト(→248)残党のヒンドゥー教徒がバリ海峡をこえてバリ島へ逃走した。今日のバリ人はジャワに起源があるマジヤパヒトの子孫であると自負してバリ・マジヤパヒトと称している。



これに対して「バリ・アガ(Bali Aga)」といわれる人々はバリ原住民であることを貫き、ヒンドゥー教への改宗を拒否した人々である。一般のバリ人とは差別ではないが敬遠されるような形で疎外され別社会を形成している。しかしバリ・アガではない一般の村でもバンジャール(→595)やスバク(→596)の慣行に見られるように大なり小なりバリ・アガ的な要素を持っている。バリ・アガであることの明らかな照明

はヒンドゥー教の拒否である。

バリ・アガの村として次項のトゥルニャン村、北部の山間のスンビラン(Sembilan)村、ジュラー(Julah)村、スカワナ(Sukawana)村が知られている。中でもバリ東部アムラプラ県の谷合いに隔離されるようにしてあるトゥンガナン(Tenganan)村は代表的なバリ・アガの村である。

トゥンガナン村では周囲を壁で仕切られた村に約4百人が生活している。周囲との同化を断固拒否する姿

勢である。村へは階段を上がり塀を越えて入る。彼らだけで信仰を守るため外部との結婚もない。もし外部の者と結婚すれば村を永久に去ることである。血族結婚のためか人口は停滞している。

これらの村に共通しているのはヒンドゥー教と異なるアニミズム信仰であり、その神殿の様式は南太平洋の島嶼にあるものを髣髴^{ほふふつ}とさせるものがある。

トゥンガナン村ではウサバ・サンバというお祭が行われる。巨大なブランコ²が造られ娘達が正装して乗る。ブランコ乗りは神聖な儀式であり遊びではない。上が下になり、下が上になることの繰り返しにより、上下、善悪の二元論を意味する。地上を離れて天国をかいま見るという意味もある。

ムカル・カルという男二人が棍棒を持って戦うのも儀式である。クドンという山羊の糞と果実を混ぜた泥を、若者が娘に投げつけて娘が泥塗れになるという儀式もある。

バリ・アガは孤立してただけに人付き合いの悪さが身についている。彼らにとって観光客も迷惑以外のなにものでもない。しかし最近では生活のために変わりつつある。トゥンガナン村ではバリ・アガであることを観光の売り物にしている。

トゥンガナン村はグリーンシン(Gringsing)という経緯緋の染織で知られている。普通のイカット(→928)を二乗倍にするという困難な作業である。コンピューターはおろかデザイン帳もない。親子伝来の手作業であるから一枚の布に8年かかるといわれる。

手間をかけて物理的にそれだけの期間を要するということは祈りのようなものらしい。そういえばグリーンシンとは“病気祓い”という意味という。衣装は寒暖防止とファッションのためだけに着るものではない。

⇒929.魂を織るイカット

661. 湖畔のトゥルニャン族

バリ島の観光地であるバトゥル山(→182)の外輪の火口壁にあるペネロカンからの眺めは素晴らしい。噴火口から煙をなびかせ、山腹は溶岩で黒く彩られ山裾には草木が復活している。溶岩と植物の“陣取り合戦”を見ているようである。

眼下にカルデラが広がり、その 1/3 は水面を横たえるカルデラ湖である。見下ろすバトゥル湖は雄大な眺めであるが、長く見ていると湖の形は井戸底の爬虫類を見るような不気味さがある。この不気味さはバリ島先住民を湖の彼方へ追いやったというバリ人の^{じくじ}忸怩たる意識の感染であろうか。

火口壁の縁から下に通じるくねくねと曲がった細い道があり、自動車の通行は可能である。ヌサドゥアから来た商売に熱心なタクシー運転手も湖畔へ降りることを拒否するのはお金の問題でない。バリ人をも拒絶する何物かがある。

ペネロカンの真下の湖岸に数軒の家があり、民家にしては大きくロスメンという民宿らしい。小さな栈橋があり小船がもやいでいる。問題は湖の対岸には霞むように見える集落である。湖岸は旧火口の絶壁で囲まれているため、その集落への道は舟しかない。見るからに外部との接触を硬く拒むような場所である。バトゥル湖畔の彼方の「トゥルニャン(Trunyan)族」の住む村は^{しんきろう}蜃気楼の彼方を見るような秘境である。

トゥルニャン村はバリ・アガの村としてよく知られている。1500 人の村の人口では部族以下の存在にすぎないが、貧困をものともせず頑なに祖先伝来の原バリ島文化ともいべき固有の文化を^{ぼくしゅ}墨守している。

² ブランコが祭りの重要な儀式であることは朝鮮の民俗にもある

観光地ではないが意を決して訪れる人もいる。バリ人は敬遠して行かないから単独行である。高い入村料を払っても住民の鋭い視線、無愛想は桃源郷といえる所ではないらしい。

トゥルニャン族の村にはバリ島のいたる所にある馴染みの寺院はない。聖所として彼らの祖先の女神が天下った場所が壁で仕切られ聖なるブリンギンの木(→050)で覆われている。宗教的にはヒンドゥー教と仏教らしき形跡もあるが、神体として麒麟のようなものが敬われているのは中国の影響と言われている。

ここで私見を述べるならばヒンドゥー教が浸透する以前のバリ島は北方からの中国文化(ドンソン文化)の受入れ窓口であったのではないかと。獅子舞に似たバロン(→954)、中国の穴あき古銭への執着などバリ文化への中国の影響がうかがわれる。



トゥルニャン族の風習のうち奇習で知られるのは葬式である。バリ・ヒンドゥー教では火葬であるが、トゥルニャン村では“風葬”の葬儀が続けられている。死骸を舟にのせて墓地まで運ばれ、そこで死骸は放置される。墓地には肉体が次第に風化して野晒しになった骸骨が累々と横たわっており、子供が骸骨を並べて遊んでいるという。

バリ島に寄宿している人の目撃談に「乞食がやってきて住民から恵みを受け、乞食は御礼も言わずに立ち去った。バリ人はバリ島の乞食はトゥルニャンである」と言った。トゥルニャンはカーストの枠外の最下層の存在らしい。

662. 漂海民バジャウ族

東南アジアの海域を家船で漂う「バジャウ(Bajau)族」という“漂海民”がいる。インドネシアではバジョと呼ばれる。フィリピンではサマまたはサマルともいわれる。家族毎に船を住居としている住所不定の人々で、オランラウト(orang laut=海の人)あるいは海のジプシーとして知られる。《オランウータン=森の人》は動物園であるのに対して、《オランラウト=海の人》は民族博物館の方である。



漂海民は陸の民と言葉が異なり差別されている。海焼けのためかやや色黒である。毛髪の色が薄いのは偏食にあるらしい。人種的にもプロト・マレー系であり宗教もアニミズムであったが、最近ではキリスト教とイスラム教への改宗が進んでいる。

バジャウ族は武器ももたず、王国も作らず、海賊を避けながら島陰から島陰へ移動している。喫水のある海賊船が進入できない珊瑚礁の浅い海が安全らしい。家船の集団は大きくなったり小さくなったり伸縮自由自在である。

漁業に従事し海に生計を抛っている。写真やビデオで見る限り狭い船内の生活は決して快適そうには見えない。出自を明らかにする旗を大事にする。澱粉性食料は陸の人から現金か物々交換で手に入れるが、無人島に簡単な栽培を行っている。

中国に輸出されるナマコやフカヒレの採取が唯一の現金収入で

あるが、他に鼈甲^{べっこう}、アオウミガメ、高瀬貝、白蝶貝、アガルアガル(テングサのような海草)、ジュゴンの採取も収入になる。交易相手は華人かブギス人商人である。小魚やイカの干物や貝は自家消費の日々の食料である。

バジャウ族では海に潜る作業はすべて男が行い、女はある年齢から海に入らない。日本には海女^{あま}という職業集団がいる。海女は黒潮に乗ってきた南方からの渡来文化の一端と考えられるが、南方には海女の手がかりは残されていない。

バジャウ族は“海の人”といわれても“海洋民族”とはいいいにくい。何故ならバジャウ族にとって海とはむしろ《逃避》の場であり、《活躍》の場ではない。海賊の被害者である。政府の誘導もありバジャウ族も最近では定着化しつつある。差別されるバジャウ族の居住地は不便な所である。初めは静かな湾内に繋留する期間が次第に長くなり、そのうち居住場所は船に替り、海の杭の上の水上家屋(→793)の集落となる。定住しても彼らの生計は移動漁民であり、陸の仕事はない。

バジャウ族のももとの出自はリアウ諸島(→094)らしいが、現在はインドネシア各地に分布しておりカリマンタン島から東に多い。フロレス島のラブアン・バジョ(バジョーの港の意)などバジョと名のつく所はバジョ船の繋留地である。

東南アジアの海域には約 20 万人のバジャウ人が各国に分散している。かつてバジャウ人が自由に往来していたインドネシア、マレーシア、フィリピン、オーストラリアの海に国境が引かれている。国境が移動が制限され、漂海民は暮らしにくくなったというのも定着化の理由であろう。

663. 吹き矢のプナン族

カリマンタン島の原住民はダヤク人と総称されるが、その中でも「プナン(Punan)族」は特異な存在の狩猟採取民である。ダヤク人の支族ではなく別系統の民族という説もある。彼等の居住地はインドネシアとマレーシアの東北寄りの国境の山中にある



農耕を一切行わない狩猟民である彼らはスンピット or コラプットという吹き矢による狩猟と採集で生計を立てている。吹き矢は約2mの長い木の筒の端を口で吹くと筒の先からから 10cm の矢が飛び出す。30m 離れた樹上の鳥を射落とすことができる。

吹き筒はウリン(→058)という硬い木の中心部分を使用する。中をくり貫くには鉄製の刃物を台に置き、台の上でぐらつかないように固定したウリンの棒をゆっくり回転させながら少しずつ削っていく。能率が良いとは思わないが、鉄以前の石器でやっていた当時の苦労は推して知るべしである。ウリン製の吹き筒はかなり重いので支えるのに体力を要し、ジャングルを持ち歩く不便である。

矢は小さいがイポーという蔦の樹液から採取した毒が塗ってある。アンチアリンという成分が含まれており心臓の働きを麻痺させる効果がある。解毒手段がないので矢は子供などの手に触れないように厳重に保管される。

イノシシのような大きな獲物は死ぬまで 30 分～1 時間かかる。吹き矢の先の槍はその際の武器である。狩猟には犬も使う。

プナン族はキャンプしながら移動する。バンドといわれる血縁関係の3～7家族で行動をともにする。組み合わせは不規則でバンドのメンバーは随時、入れ替わる。住居は小川のほとりに野営地を設ける。立ち木を利用した高床式のラミンという小屋である。数日の雨露をしのぐためだけの壁もない簡単なものである。衣類は下半身に木の皮で作られた褌^{ふんどし}か腰巻きをつけるだけである。

ダヤク人と比較するとプナン族は色が白く容貌からは日本人や中国人と見間違いくらいである。ジャングルの中を彷徨^{ほうこう}しているため日に当たらないためらしい。プナン族の定着化政策で子供を学校に入れたら運動場で日射病で倒れたという話がある。

自給自足の生活であるが、鉄器と塩は外部か入手せざるをえない。ケニヤ族、カヤン族と不即不離の関係を保ち外部との接触を保っている。鉄器と塩、あるいは布のために交換のため樹脂、沈香、燕の巣、砂金を採取する。籐製のマットが唯一の製品である。

プナン族はカリマンタン島の中では最も未開の部族である。このため森林伐採、ダム建設など押し寄せる文明化の波に最も脆い。開発のより進んでいるマレーシアのサラワク州の環境破壊がプナン族の桃源境を脅かすという形で問題提起されている。

インドネシアもマレーシアもプナン人を定着させようとしている。国民にあまねく文明の恩恵を施すという国家的善意の発露からである。しかしプナン族を追い出さないと NGO が煩くて森林伐採やダム建設がやりにくいという不純な動機が潜んでいないとはいえない。⇒624.ダヤク人

664. 石器使用のヤリ族

ニューギニア島の脊梁山脈は4千^{メートル}を越える峰が 20 近くもある。険しい山と谷に阻まれて探検隊といえど容易なことでは近付けない。外からの文化から隔離した谷に石器時代さながらの生活している孤立した部族もいる。「過去と現在が同居し石器時代の人間が20世紀に暮らすような」³所である。

面白おかしく語り伝えられるところによれば、ニューギニア山中のどこかに女だけからなる部族の集団がある。男が迷い込むと「種付け」だけして殺される。生まれた子のうち男は殺され、女だけが育てられる。このようなアマゾネスの話が伝えられ、調査団が派遣されたが確認できていない。何が発見されてもそれほど驚くことがないのがニューギニア島である。

ノーマン・ルイス著「東方の帝国」にニューギニア山中のヤリ(Yali)族を訪れたルポタージュを紹介したい。ニュー・ギニア高地人ではダニ族がよく知られているが、ダニ族以外にも多くの部族がいる。

ヤリ族の肌色は黒くパプア系人種であるが身体はピグミー並に小さい。豊かなバリエム溪谷に住むダニ族の体躯と比較すれば、栄養の貧困がヤリ族の体質遺伝子になったのであろう。言語はヤリ語であり、3地方語を話すものを含めて3万人である。

彼らの居住するエンドマン村はニューギニア山中の険しい山地の斜面にへばりつくようにしてある。ジャングルを切り開いた猫の額ほどの畑を木の棒で掘り起こす。農耕はもとより力仕事も女の分担である。1991 年当時において石器時代の生活をする。

男は戦闘要員で日常の仕事はしない。戦争は男の仕事であり、生きがいである。近隣の村とは定例行事のごとく部族戦争がある。戦争の原因は土地、女、食料の何でも口実になる。戦争は男にとって気晴らしであ

³ チャールス・コーン著「インドネシア群島紀行」

るが、結果的に食料供給に見合う人口調整手段となっている。戦闘で死ねば食べられた。

ヤリ族の村は 1950 年代後半に探検家によって発見され、1961 年にはキリスト教宣教師が布教のため訪れ、貝殻と鉄製の斧を与えて飛行場を作った。飛行機によって外部と繋がり、宣教師が遣って来て教会を建て、インドネシア政府がやってきて学校を建てた。



教会と政府が行ったことは戦争の禁止である。彼等に戦争を禁じるのはライオンに狩を禁じるようなものだろう。このため男どもが所在なさげにブラブラするようになった。見かねた当局の肝いりで“模擬戦争”が行われる。

男性はコテカ(→790)姿に猪の歯や極楽鳥の羽で戦闘スタイルに盛装し、武器として槍を持つ。模擬戦争であるから始めは穏やかであるが、次第に興奮し死者もでる。戦争に勝っても相手を食べることはできないが、隣の部族とはどんなことがあっても負けるなというのが彼らの信条である。かれらの世界では自分らの住む地域が世界のすべてであり、これ以上のことを考える必要がなかった。

⇒627.ニューギニア高地人

665. 彫像のアスマット族

地図を見るとニューギニア島の南岸には緑が広がっている。熱帯の地図の緑とはマングローブかスワンプで人の居住には最悪の所である。その最悪の孤立した地域に居住するが「アスマット(Asmat)族」である。いくつかの部族数があるが、総人口は7万人である。



メラウケ(→242)から小型飛行機とボートに乗り継いでアスマットの中心地アガット(Agat)村に向かう。訪問記によると「ファ！、ファ！、ファ！」という雄たけびをあげながら踊る戦士の歓迎を受ける。水路を遡上する舟の中でも「ファ！、ファ！、ファ！」という叫び声は絶えない。

マングローブにある居住地はフワフワと浮いており、立って歩ける地面がない。サゴ椰子で生活するアスマット族は他のイリアンの部族と同じように首狩りと食人の風習を維持してきた。彼らの生きがいであった隣の集落との戦争も絶えて久しい。これもキリスト教布教の成果であろう。そのアスマット族が名高いのは木彫り彫刻の故である。

千里の民族学博物館にある世界各地の彫刻の収集品の多くは 1970 年の大阪万国博覧会のために収集されものが博物館に引き継がれたものである。北米インディアンのも、アフリカの面などもすばらしいが、中でも迫力で圧倒されるのはニューギニア島の民族の作品である。セピック河流域の収集品であるがアスマット族と通じている。民族学博物館の最初のプロムナードの彫像は余りにも強烈で度肝を抜かれること請け合いである。東京の高田馬場にあるインドネシア文化宮にもアスマットのコーナーがある。

アスマットのプリミティブ・アートに魅せられて収集にきていたアメリカの石油財閥ロックフェラーの御曹司マイケルがボートだけ残して行方不明になったのは 1961 年のことである。家族は金を惜しまず捜索団を派遣する用意はあったが、当時の国際関係からままならなかった。事故というのがインドネシア側の公式発表であっ

インドネシア専科

だが、人か鱈^{わに}のどちらかに食べられたらしい。御曹司のアスマット彫刻のコレクションがメトロポリタン美術館に展示されている。

部族によって彫刻の種類が異なり、奔放な戦闘盾で知られた部族もいる。よく知られているのは人の上に人が乗り何重にも重なって行く祖先を刻んだトーテムポールのような塔である。ムビス(ビス)といわれる祖先と子孫を繋ぐ生命の樹である。他部族との戦闘の旗印に使われた。現在ではデザインが流用されビスポールの土産物が溢れている。

ムビスはアスマット族にとって人であり命であった。木に刻んだ祖先を崇拝した。しかしキリスト教によって魂の木彫りは邪教とされ、アスマット彫刻は単なる芸術となり、さらには観光土産の木彫りになった。

精悍なアスマット族がマニユファクチャーの工場のような所に閉じ込められ、ジャカルタのスポンサーのためにせせせと刻んでいる。大量生産で質は低下しており、何より民族の魂がない。要するに文化の略奪である。

著者 大槻 重之 (おおつき しげゆき)



著者略歴

- 1938 京都府綾部市に生まれる
- 1961 大阪大学経済学部卒業
関西電力入社
以降主として燃料業務に従事
- 1998 関西電力退職後三田市に居住

- 著書 「燃料が電気をつくる」1972
「インドネシア百科」1991
「バリ島百科」1992
「マレーシア百科」1993
「続・インドネシア百科」1994
「石炭をゆく」1998

インドネシア専科 (第7巻) F 社会編 上

発行日 平成 20 (2008) 年 2 月 15 日

著 者 大槻 重之

発行者 大槻 重之

